

禅語

令和3年1月17日(日) 10:00~11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

1. はじめに

住友の経営の底流に禅哲学がある。別子銅山を学習する人は、禅語の一つも読める人になってもらいたい。別子銅山を学習する人にとって、禅を知ることが別子銅山を稼業した住友を知る一つの道である。茶席でよく見かける禅語を読んでみる。

禅は見るものでもなければ、聞くものでもない。また識るものでもない。禅は行じるものである。瑞応寺で坐禅するもよし。住友の聖地と言われる旧別子・銅山峰登山でそれに迫ってみるのも一つである。

2. 禅

平安時代の貴族社会の荘厳された顕密の仏教に対して、禅宗は異国趣味として、鎌倉時代に武家社会に歓迎された。一部は密教化した。鎌倉・室町時代の当初の禅は、上層階級の異国趣味として文字に抱泥し、ことに悟りの境地を表現するため(偈=漢詩形式の韻文)に、漢詩、漢文学の教養を必要としていた。江戸時代になって、経済成長してくると民衆の中に広く根をおろす。逆行して禅宗自体が大きく変化する。

難行 → 易行 に転化する。

動中の工夫・不断の坐禅

日常生活でできるものとする

玄関(玄妙の世界に入る関門) = 仏教の入り口

その意味も知らずに、ポーツ生きている日本人の何んともいことか
ちこちゃんに叱られる

床の間、付け書院、違い棚、ふすま、障子、欄間、縁側

三度の食事の風習も、禅宗に伴って渡って来る

茶道、茶の湯も禅と深く結びついている

幸平は、家長の奥さんが「六地藏」の茶碗を買った時、座敷牢に入れた→**禅を知らない**

教養として京都の叔父に漢詩を習う(幸平遺稿にはいい詩がある)

広瀬邸の新座敷には三畳台目の茶室がある→家長を開坑250年祭に迎える為
庭の指月庵は抹茶でなく、文人好みの煎茶用

天保11年の絵図 勘場に百合庵がある 手代文化としてある

貞剛は、民間でも国家に貢献できると住友に入社する

「君子財を愛す それを取るに道あり」と見抜いた 給料は半減

鈴木、中田、湯川、小倉も国家公務員として教養を身につけていた

禅は生活そのものが修行である。仕事や日常生活そのもの。 三昧

そのものになりきる。なりきるには無になる。有る無しではなく「絶対無」=「空」。

山岡鉄舟「晴れてよし、曇りてよし 富士の山 元の姿は 変わらざりけれ」

風の日風を楽しみ、雨の日雨を楽しみ、晴れの日晴れを楽しむ。

日々是好日 水随方円器 e.t.c

3. 禅語

01. 一期一会

「一期」は人間の一生、「一会」はたった一度の出会い。古くは千利休の直弟子であった山上宗二が書きとどめた山上宗二記にその考え方が出てくる。井伊直弼は、「そもそも茶の交会是、一期一会といて、たとえば幾たび同じ主客と交會するも今日の会に再びかえざることを思えば、実には一世一度の会なり」と自分に言い聞かせている。他者との出会い、真実の自己に邂逅することの困難さを受けとめる。人や物に会った時が別れだから、今日の素晴らしい出会いは一回限りかもしれないと考えれば、その瞬間その瞬間は繰り返されることではない大切なものであるから、いま、ここで、自分の全力を出し切って相手に接する。全力を出し切って事に当たる。

02. 明歴歴 露堂堂

「歴歴」はあきらかなようす。「露」はあらわす。妄想を離れた心には、世界が一点の曇りもなく明らかに見えてくる。

天地のすべてのものは、何も隠すことなく明らかに堂々と私たちの目の前に姿を現している。そのありのままの姿が見えないのは、目をしっかりと見開いていないからであり、心の目が曇り、五感が錆びているからである。

03. 松樹千年翠

「松樹千年翠 不入時人意」の語句から、世の人の目には入らぬが、変わらない松の緑をたたえた言葉。もともとの語は「松柏千年青」。春には花見、秋は紅葉と日本人は四季の移ろいを好み、愛でる。一方、緑の葉を一年中保ち変化に乏しい松は、人の目を引くことは少ない存在である。しかし、海岸や断崖などの厳しい環境の中でもしっかりと根をおろして力強く生きている。表だっては目立たないが、小さな変化を繰り返して風雪に耐えて千年の翠を維持している。

日本人の最も好む庭木は松である。幾百年の風雪に耐えた新磯の老松が、日本人の心の中に海への永劫の表象としてとして思い偲ばせるものがある。

04. 松柏千年碧

松や柏(ハクビシン)は、千年の長い年月を経ても風雪に耐え抜いて、その緑の色を変えな

い。永遠に繁栄する。天空の神は一年中緑の木々を目印にして降臨する。

柏はカシワ餅に用いるクヌギ類の木ではなく、檜に似た常緑樹木、幹は屋久杉のようにゴツゴツして、枝も大きく分かれる。

「このまま別子の山を荒蕪するにまかせておくことは、天地の大道に背くのである。どうかして濫伐のあとを償ひ、別子全山を旧のあおあおとした姿にして、之を自然に返さねばならない」との伊庭貞剛の言葉は、まさしく千古の翠を回復する反省である。

05. 和敬清寂

憎しみ、怒り、怨みなどが整頓されて和が得られたことが実感できると、自然に他を敬わずにはおられない。相互に敬って和が成り立つ。和して敬すると、心にこだわりがなくなり心が清々すがすがしくなる。煩惱の火が静まり心の寂けさに至る。煩惱が知恵にまで和らげるのが、茶の心がここに凝縮されているといわれる所以である。人と事とが出会う日々の生活の規範でもある。茶の湯では「四則」と称する。

06. 日日是好日

碧巖録の第六則にある言葉。常識的にいうところの毎日が大安吉日ではない。お日がらがいいとか、お日がらが悪いとかの計らいやこだわりを離れる。自分を中心とする考え方を去って、環境の中に美なるもの、真なるものを開発する。

一日を終えた時、今日すべきことはやり尽くして、もうこれ以上することは何もないので、今日は好き日であったと思う。今この一瞬を大事にして、自分の生き方に手を抜かず、充実した日々をおくる。一日一日の積み重ねが、命の積み重ねである。今という瞬間、瞬間の積み重ねである。

07. 行雲流水

雲はなんのこだわりもなく空に漂い、流れる水は一か所にとどまることがない。行く雲、流れる水のように悠々と自在に場所を変え、一切のものに執着することなく生きていく。ある時は川を流れ海にそそぎ、太陽に温められて蒸発して雲となり、やがて雨となって川にもどり、海にもどる。水の惑星である地球を潤す水の循環でもある。単に循環しているのではなく、大地のミネラルを水に溶かし込み、時間をかけて生命誕生の海を作った。

08. 耕不盡

農地を毎年耕して米、麦、野菜などの豊かな収穫をあげている。しかし、農地そのものは無くなりはない。深く耕し、肥料を十分にやり、地味を肥やしていつまでも豊穡な収穫をもたらす。精進するのは、実技を学び資格を取るためだけではなく、それによって心田を耕し、心を練磨することを願うかである。そして自他のために活用しようとの誓願からである。心田の耕うんは、どこまで行っても限りがない。ヨーロッパ言語の文化は農地を耕すから出

た言葉である。 a g r i c u l t u r e → c u l t u r e
 (農業) (文化)

09. 本来無一物

人間はこの世に生まれてきた時は裸で何一つ身につけていない。また人間は死ぬ時は生前に築いた巨万の富も持たずにこの世を去る。本来何も無いとの絶対否定。すべての執われはもともと何も無いのだと、「空」に至った純粹人間性の原点に立つとの認識。生きている時にできることは「空」への修行だけである。

10. 青山元不動

青く聳える山は不動であり、時々正起してやまない妄想や煩悩に覆われても、その奥には煩悩などに動かされない本質が厳然とある。青々とした山そのものが真理の顕現であり、本来清浄なる心そのものである。

11. 和顔布施

金品を持っていなくても笑顔で人に対することは誰でもできることであるが、好き嫌いや利得が先にたって、人への対し方を考えてしまう。何があっても笑顔で対面すれば、充実した人生を送ることができる。

12. 且坐喫茶

「しばらく坐って茶を召し上がれ」という日常そのもの。やがて一行物に揮毫されるようになった。お茶の原点に帰れば、湯を沸かして茶を点て、仏にそなえ、人にも施し、自分も飲むことである。当たり前のことを、当たり前にする。よりおいしいお茶を飲もうとすると、工夫と選択が生まれる。作為におぼれることなく真心を尽くすことが困難である。

登山して、山道に腰を落として茶を点て飲むのは実に美味しい。健康に感謝する。銅山峰山頂や歡喜坑前の野点は最高である。

13. 一滴如大海

一滴の水もスケールを変えて見ると大海に見える。見方によってものが違って見える。極小がすなわち極大となり、極大がすなわち極小となる。自由自在な心を持ては、臨機応変にものが見える。固定観念にとらわれなかったら自由になれる。人は自分の尺度で見てしまう。相対世界では、大小、長短、広狭の違いがあるが、絶対の世界では大小、長短、広狭の違いはない。一碗の茶は大海に匹敵する。

14. 年年歳歳花相似

「年年歳歳花相似 歳歳年年人不同」。花は今年も去年と同じように咲くが、人はといえ、今年と去年とではすでに違っている。大自然の悠久さに対して人生は無常である。刻々、

日々変化する一回限りの人生を、いま、ここに、どのように生きていくかが課題である。若い時は時間の経過が感じられないが、年を取ると時間の経過がひしひしと感じられる。写真に写る顔の老いに驚くとともに、顔に責任が持てているかと反省すること、しきりである。誰も、一年一年等しく加齢していく。

15. 独坐大雄峯

百丈禪師に修行僧が問うた時の答えが「独坐大雄峯」。私は、いま、ここに、ひとり、こうして坐っている。大雄峯は百丈禪師が住した江西省百丈山の別名。

「独」は孤独ではなく、かけがえのない我なるがゆえに大切に生きる。「坐」は、土の上に二個の人が並んだ形、仏とただの人間。人間の内部に仏と凡夫が同居していて、二人の対話が多ければ心が豊かになる。

16. 直心是道場

「維摩経」の有名な言葉。「道場」とは釈迦が悟られた菩提樹の下の座のこと。後にはそれぞれ修行する神聖な場所をいう。光厳童子(こんごんどうじ)が、維摩居士に路上で出会い、「どちらからおいでですか」と聞くと「道場から来た」と不思議な答え方をした。道場は童子が出てきた城内にあるので、まるっきり反対方向である。童子は修行のために騒がしい町を出て清閑な地に行きたいと思っていたので、道場のありかを問うた。道場は環境や建物ではなく、心の問題である。「直心」とは、心を整えて真っすぐに進み、乱れることのないここである。素直で柔軟な心である。とらわれのない心。

17. 乾坤只一人

「宇宙無双日 乾坤只一人」の対句。「宇宙無双日」とは、宇宙に太陽は二つとないということ。「乾坤」とは、天と地。「乾坤只一人」とは、天と地の間に自分ただ一人であるということ。一つしかない太陽が全ての自然の恵みをもたらすように、自分も慈悲の心をすべてのものに注ぐことのできる存在であるはずである。天地に我一人、自信を持って生きて行く。

18. 無一物中無盡蔵

全ての事物は本来「空」だから、固定化、実体化したものはなにもなく、一瞬一瞬にうつろいて行くとなれば、執着すべきものは何もない。何もないと思っても、そこには何でもある。すべてのものは係わり合い、支え合って成り立っている。

知らないことに出くわすと本を読んだり、人に尋ねたりして知る。知らないことが多いことは、知るに変わることが多くあるということである。

19. 主人公

瑞巖の師彦和尚は、毎日自らを主人公と呼び、自ら応諾した。しっかり目を覚まして本来

の面目を保っているかと、自問自答した。ドラマの主人公ではない。本心本性の自己、真実の自分のこと。純粹な自己。自分の中の主人公を忘れずに生きようとの喚起。人間とは、日常的自我と本質的自我の同行二人で歩む旅人である。

20. 歩歩是道場

修行は道場だけではありません。日々の暮らし、言動のすべてが道場であり、修行である。仕事は、机の上だけであるものなのか。生活体験の蓄積の上に今の自分があり、それをベースに課題に取り組んでいる。仕事から最も遠いと思っていることの経験が、仕事の隣にいる。道場という名の限定された場にとらわれず、すること為すことの一步一步が人生の修行であり、社会とのかかわりの肥である。

21. 洗心

雑念や執着を捨て去れば、心は新たになる。それにより心の汚れを洗うことができる。日々の修行はすべて心を洗う作業である。ふだん顔や手足の汚れは気になって湯水で洗うが、心の汚れはあまり気にしない。日々の生活の中で人を思いやり、やさしく接する善行は、汚れを貯めない方法の一つである。

22. 無事は貴人

禪でいう「無事」は、仏道や救いを外に求めないことをいう。自分の内なる純粹な魂(仏性)と出逢うことが出来れば、無事であり貴人である。貴人とは、安心を得た人、悟りを得た人。社会的に地位の高い人ではない。

23. 柳緑花紅

柳が新緑の枝を垂らし、花は紅に咲き誇っていることは、何千年と繰り返されてきた春の景色である。ただそれだけである。柳は柳、花は花でそこには価値の優劣はない。ありのままの姿をあらわにしている。ありのままをありのままに受け取り、そこに真実を見る。ついつい他人と比べてしまうが、比べたところでそこには得るものはない。逆に失うものがある。

24. 色即是空

この世にあるもの(色)は、因と縁によって存在しているだけで実態はない(空)という大乘仏教の基本的な考え方。目に見えるもの、手に触れることができるものだけに心をとらわれてはいけない。その背景にある天地の働きによって我々はこの世に生かされていることを知る。

25. 一日不作 一日不食

禪以前の仏教では働くことを否定していたが、禪門では、掃除、洗濯、炊事から畑仕事、

草取り、剪定や土木工事まで、日々体を動かして働くことを重視する。日常の作務が修行であるとのとらえ方である。百丈禪師は80歳になっても毎日作務をやめなかったので、弟子たちは老体を心配して、一計を案じて道具を隠した。百丈禪師は、やむなく作務をやめたが、今度は食事をとらなかった。「一日為すべき務めも果たさない身であれば、腹を満たす食事は頂戴することはできない。」と禪者のあり方を示した。今日一日を我が身に羞じることなく過ごしたか自問してみる。

26. 和光同塵

仏、菩薩が自分の持っている徳や才能の光を和げ隠して、世俗に交じって悩める人々を救うこと。「私でなくちゃ」を捨てて「謙虚」である。自分の体験に固執して他人の意見を聞こうとしない。失敗を失敗と認めようとしない。いささかの知識に満足して自慢げにふるまう。これでは進歩も向上も期待できない。とにもかくにも自分一人幸せになって終わりではなく、みんなが幸せになることを願って、いっしょに悲しみ喜ぶ。

27. 隻手音声

打てない片手の音をどう聞くかとの白隠の有名な考案。「隻手音声」に何か意味のある答えを出そうとしても無駄である。世の中の言葉では説明できないものがたくさんある。声なき声を耳できくのではなく、全身全霊で聴きとる。

28. 啐啄同時

「啐」は、今まさに生まれ出ようとする雛が卵の中から殻を破ろうとすること。「啄」は、親鳥が外からくちばしで卵の殻をつつくこと。生まれ出ようとするものと、それを手助けするもののタイミングがぴったり一致すること。手助けのタイミングが早すぎたら中の雛は死んでしまう。機を逃さないために重要なことは、相手が今どんな状態であるかをよく理解していることである。

29. 一華開五葉

一輪の花が美しい五弁の花弁を開き、やがて立派な果実を実らせる。五葉を心の花を開くとの解釈もある。五つの心智に目覚めれば、煩惱も消えるとの考えである。「大円鏡智」「平等性智」「妙観察智」「成所作智」「法界体性智」。

30. 拈華微笑

釈尊がある説法の時に無言で一輪の花を差し出すと、弟子の摩訶迦葉だけが微笑みを返した。真意は心から心に伝わるとの教え。不立文字、教外別伝(文字や言葉で伝えられないこと)。以心伝心(心をもって心に伝える)。世の中には、いくら説明しても伝わらないことがある。生活をいっしょにして、24時間過ごすことを重ね、工夫を施して写し取る師弟の

職人技は、理屈ではない。受け取るには下地が無ければ受けられない。下地を見極めなければ伝えられない。

31. 平常心是道

「道とはどんなものか。」の問いに対する答えが、「平常心是道」（ふだんの心こそ道である）。心の「平常心」は、ふだんどおりの心ではなく、日常の小さな行いもおろそかにしない心である。日々を怠惰に過ごして無駄にしないで、当たり前のことを当たり前にする心を大切にする。

32. 名利共休

名誉もお金もいらぬという覚悟。千宗易は、「名利共に休す」から「利休」と名のつた。人間は欲の塊で、仏教では食欲、性欲、睡眠欲、名誉欲、財欲を「五欲」、「五塵」と言い、煩惱を生じさせる厄介の原因と考える。茶の湯では道を見失ったら、「利休に帰れ」とよく言われるが、何に帰るのか分かっていない人がいる。何のために茶道の道に入ったのか分からないでいるからである。目線が外を向いているから常に回りと自己との関係を気にしてしまう。目線は中を向いて自己を見極めなければならない。利休は、自らの没後には「茶道廃るべし」と言い残している。

33. 喫茶去

「まあ、お茶でも召し上がれ。」または「お茶でも飲んで出直せ。」の意味。お茶を飲むように勧められる言葉には、まずはいろいろな執着を捨て、利害や相手の地位、賢愚を越えて、分け隔てなく相手することの大切さが込められている。茶室では、亭主と客が地位や肩書を捨てて平等に接するのは、この平常心である。（その時、できれば水は吟味していただければ嬉しい。お菓子も美味しいものなれば、尚嬉しい。）

34. 多少破草鞋

履き古してちぎれてしまった草鞋は、何の役にも立たない。生活人として履物は必要である。生きて行く上で知識は必要であり、高等な知識が望まれる。しかし、それが役立たないときがある。履物の知識も古くなると無用になるが、新品でも役立たないときがある。人生の真実が分かってくると、破れ草鞋をもう一度拾い上げる。壁の下地に使ったり、堆肥にする。袈裟も用をなくした古布を綴って身にまとったものである。

35. 白雲抱幽石

白雲が苔むす幽邃な石を抱く深山幽谷の景観。世間の喧騒を離れた山中の閑居。雲は石が吐き出す息であると形容される。その雲もやがて凝って雨となって幽石に注ぐ。苔むす幽石は古くなった石だけでなく、美しいもの、真なるものが隠されている。内在の外在化、外在

の内在化。

36. 照顧却下・看却下

日々の暮らしの足下をこそ照らし、顧みるべきであるとの戒めの言葉。仕事や人間関係、家庭でも前ばかり見過ぎて足下がおろそかになっていないだろうか。禅では、日常すべてが修行であり、日常の中に真理があると考ええる。

37. 掬水月在手

自分とかけ離れた、遠くにある美しいものとして月を見ているだけでは、そのものに気づくことは出来ない。水を掬うという働きかけがあって初めて、月は心の中に入って来て自分のものとして感じられる。壁にぶつかって立ちすくなんでは状況は変わらない。どうなるか分からないが行動を起こすことによって状況に変化が起こり、打開の道が開ける。一つの動きが、人知の範囲を越えて動きを生む。

昔は銅鏡に月を写し、鏡に生ずる水滴を集めて月の精を飲用するという行為があった。宇宙の彼方の月と係わる仕方として名案である。

38. 無功德

武帝が達磨に仏教普及の功德を問うた時の達磨の答えが「無功德」であった。

笑顔であいさつをしたら、笑顔であいさつを返してほしい。人助けをしたら、お礼の一言を言ってほしい。それは人情であり、そこには無意識に見返りを期待している。功德とは、善い行いに対する報いである。でも功德を得るために善行をしても、功德はもたらされない。打算や下心を捨てて、無心で行うことが第一である。

39. 明珠在掌

透明で曇りのない珠玉は、てのひらの中に在る。自分が持っている美しい宝物に気づかず、外ばかり見て苦しんでいる。宝物は宝石だけでなく、個性や能力と置き換えると目線は自分に向かう。幸せの青い鳥は、家の中で飼っていたのに、家の外へ探し求めて歩きまわる。やがて家の鳥籠の中の「青い鳥」に気がつく童話も同じことを言っている。

40. 自灯明 法灯明

釈尊が亡くなる間際に、弟子の「何を頼りに生きていいのか。」の問いの答え。

闇の中で前を照らす灯が無くなったらどうするのか。進むのをやめる、後戻りする、の答えが返ってきたそうであるが、そんな時には、自分自身を灯りと思って進めばいい。自分を信じて前に進む、自分が信じるものを信じて前に進む。闇の中で途方にくれて時間を無駄にするよりは、一歩踏み出し、自分自身を灯理として進む。それには心の羅針盤を持っていないなければならない。

41. 紅炉一点雪

赤々と燃え盛っている炉の上にチラリと一ひらの雪が入って来た。一瞬にして消え、跡形も残さないという意味で、「紅炉」「雪」を何に譬えるかによって、いろいろな受け取り方ができる。天地の悠久さからすれば、人の寿命は一瞬でしかない。46億年の地球の歴史からすると人生80年は、ほんの一瞬でしかない。しかし生きたということは無ではなく有である。求道探求の情熱さえ絶やさず燃やし続けていれば、内外のいっさいの障害は消え失せてしまう。

42. 放下著

「放下著」とは、捨ててしまえ。「著」は強調の助詞。肩書、地位、金銭、財産など捨ててしまえば楽になるのに、捨てられないのが人情であるが、捨てるべき転機が人生の節目、節目にある。就職、転職、退職、結婚などの節目に進むべき方向が見えなくなったりする。その場合の大半は過去に引きずられている。何もかも捨てた「素」の自分に戻ってみる。いっさいが理のままに見えて来る。未来を見据えられる。

43. 知足

仏道修行者が固く守って修行する8項目は、小欲、寂静、精進、不忘念、禅定、修智慧、認識、知足。「足ることを知る」とは、既に得たものでも、これを受けるには分限を知れということ。足ることを知る者は、いささかも不平不満の心が起こらないから、心に落ち着きがあり、不安が無い。足るを知る者は、身貧しけれども心富む。得るところを貧する者は、身富めども心貧し。

松平不昧は、「茶の本意は知足を本とす。茶道とは分々に足ることを知るという方便なり。足ることを知れば、茶を点てて不足こそ楽しみとなれ。」と茶によって知足を行じて智慧を身につけよと言っている。

蹲^{つくばい}の真ん中に口を彫り込み、吾、唯、足、知の口に当てたものがある。

44. 無事

救いや悟りの道を外に求めなくてもよいことに気づいた安らぎの境地を言う。

「無事」は、元々は『老子』に由来する道教の言葉である。自分の外に求めることをやめ、造作せず、平常であることが「無事」である。隣の芝生をきれいだ、隣の人の麦飯が美味しそうだと見たりしないで、自分の中に潜む無限の可能性にこそ全てがあると信じることである。行動している際の「無事」は、意識を自分の行動そのものに置き続けることである。点前順序の記憶を頭で手繰り寄せてするのでなく、体で覚えたままにすることである。その点前ができたなら無事は貴人。

45. 閑古錐

長年使いこんだため先が丸くなった鋭利さを失った古い錐のこと。本来の自己に目覚め

た後も、それによって得た活殺自在で鋭利な働きを長養し、更に老練として鋭さや悟り臭さも影をひそめ、迷悟両忘の境地に至る。円熟した境涯。

46. 壺中日月長

悟りの妙境は、誠にうららかにして時間の制約や拘束がない。狭いところではあるが、一事の念頭にかかるものもない身であれば、安閑無事で、大いに楽しい。茶室などは、四畳半の小間を、三畳台目(畳三枚+3/4畳)、二畳台目(畳二枚+3/4畳)、一畳台目(畳一枚+3/4畳)と縮めていって、極小化の中で極大を感じることを楽しんでいる。

47. 百花春至為誰開

冬枯れの季節を過ぎて、春風が吹けばたくさんの花が咲き乱れる。花は人の心を和ませるために咲くわけでない。花はその生命のおもむくままに、無心に咲き、無心に散っていく。何の計らいもなくありのままに咲く。自然の理である。

48. 莫妄想

妄想すること莫れ。現実からかけ離れた空想や夢を行な、考えても仕方ないことをくよくよと考えるな、ということ。済んでしまったことは、元には戻らないから、今出来ることに全力を尽くして未来に生きる。

49. 葉葉起清風

この言葉はもともと、中国の虚堂和尚が、寒山、拾得、豊干の三人の道友が遠く天台山の国清寺に旅立つのを見送った際の偈に由来している。

誰か知らん三隠寂寥の中
話に困って盟を尋^{あた}め鷺峰に別れんとす
相送り門に当たれば脩竹あり
君が為に葉葉清風を起こす

今と違い当時は、ここで別れたらいつまた会えるか分からない時代であった。もしかしたらこれが永遠の別れになるかもしれないと本気で思ったことであろう。虚堂和尚は激励して見送ってあげなければと思ったそこへ、清風が吹いてきて、見送りに出た門のあたりの背の高い竹が、まるで三人の為とでもいうようにサワサワと音を立てた。それは見送る人のこみ上げる気持ちを、爽やかに解き放つ風だったのかもしれない。寂しさをこらえた見送る人の全身全霊が風を起こしたのかもしれない。

「葉葉起清風」を「葉葉、清風を起こす」と読むはいけない。風を起こすとの働きをすることになって擬人法になる。「起こす」は行為動詞でなく現象動詞であるから「葉葉に清風

が起こる」と読むのが正しい。竹林のあちらの葉を揺らす風と、こちらの葉を揺らす風とは、相即相入する円融交差して互いに妨げない様は、自他不二の境地である。まさに「空」である。

50. 溪声広長舌 山色清浄身

東坡の七言絶句を雪堂の行和尚は五言絶句に改作った起承の二行。溪の声はすなわち広長舌で、仏の優れた説法として聞ける。山の雄大な姿がそのまま仏の清浄な身姿として見える。聞くもの、見るものは、受け止める人の心によって仏となる。五感を平常心に保てば、歓喜の心境に至る。

4月から11月まで旧別子・銅山峰登山研修の案内をしていると、季節ごとに足谷川の川音は異なり、緑が回復した足谷の木々の色の移ろいは崇高なものに感じられる。

51. 宝剣在手裏

金剛王の宝剣は、般若の智剣であるが、それを手中に握り自由自在にふるうことができる。機に臨み変に応じて自由自在である。その法剣は他から与えられるものでなく、各自が生まれた時から平等に付与されているものである。しかし、凡人はそのことに気づかないでいる。だから一度は修行、精進して鈍らせているものを拭わなければならない。

52. 吟風一様松

朝、戸外に出てみると松の梢もみな風に鳴って天然の楽を奏している。白砂青松の瀬戸内海の海岸の松林では、風に音を立てている。その音は、聞く人が聞けば、自然のコーラスであり、仏の説法に聞こえる。釜の釜鳴りに松声を聞く。

53. 水随方円器

水は形にこだわらないから、四角い器でも、丸い器でも自由自在に満たすことができる。あれは嫌いだ、これも嫌いだと不平不満を述べるだけで一步も進まない人がいるが、すべてが有り難かったらそれら従うだけで幸せを感じる。わだかまりを取り除けば、自由人である。人は煩惱の塵に漏れている。受け入れれば満たされる。

天円地方の考え方すると、水の循環を示しているとも解釈できる。方円の器は、大地と天空を示すから、空中の水蒸気はやがて雲となり雨を降らす。雨は集まりて川となりて海に集まり、蒸発して空中の水蒸気となる。

54. 雪月花

七事式の最初が花月之式であり、七事式の追加として考案されたものに雪月花之式がある。花月は春と秋であり、雪は冬である。花を愛で、明月を愛で、雪に思いをはせて盃を傾ける。では夏は何か。風である。屋上ビヤホールの夜風がうれしい。

春に百花あり、秋に月あり
もし閑事の心頭に掛かること無くんば、

夏に涼風あり、冬に雪あり。
便すなわちこれ人間の好季節。

閑事とは、無駄ごと、余計なもの。拡大していえば、人間と自然の対立、人間相互の文化摩擦や対立関係でもある。今は文明の名のもとに人間本位の自然改造という自然破壊が進められている。それは、地球規模の問題になっている。生活手段が便利になればなるほど、かえって生き苦しく感じるようになる。産業の膨張社会の一員として、複雑な情報社会を生きる私達は、あまりにも忙しい。無事是貴人。何もすることが無いのがいちばん尊い。有事にとらわれて毎日走り回っている現代人への痛棒の言葉である。

55. 古今無二路

人の進む道は、現象的には多岐多端たたんであるが、時の古今、洋の東西を問わず唯一つである。釈迦、孔子、老子をはじめとして古来の賢者が説いてきた道は、説き方や重点の置き方は違っても、その根本は同じである。やり方は違っても賢者たちの行く道は、今も昔も一つである。今、目の前にある自分の責任を気を散らさずに黙々と果たしていくという道である。

56. 守拙全天真

「拙」は巧みの反対で、つたない、鈍い、愚鈍というような意味である。「守拙」とは、小器用に利巧に振舞おうとはせず、愚直に自己を飾らず正直に事にあたることである。「天真」は、天然、自然のままの本心本性、世俗に汚染されていない仏性のことである。

明時代の「菜根譚」に、「文は拙を以て進み、道は拙を以て成る。」とある。朴拙愚直な者は、修行はのろいが、根気よくつとめるために、いつの間にか修行をやり遂げる。

57. 海潤百川朝

海は潤ひろくおおらかで、そこに流入するいっさいの河川の水を、清濁、多少にかかわらず受け入れて、少しも溢れることはない。大人物の見識、度量は広い海のようなものである。

58. 眉毛横眼上

眉毛が眼の上に横たわることは、当たり前のこと。眉毛が眼の上に在って眼を保護する役目に果たしている。眉毛は目の上に在って、上位だと誇ることもない。

当たり前のものが当たり前に在り、当たり前のことを、当たり前にするのが禅の奥儀である。

59. 結果自然成

やるだけのことを精一杯やったら、後は自然に結果が実るのを待てばいい。実が熟すのを待てないのは、それまでの精一杯が足りなかったかもしれない。土地も耕さず、種もまかず、水もやらずに「芽が出ない。」はない。やるだけやれば思い悩むことはない。

60. 花枝自短長

花壇に咲いている花も、野にひっそりと咲いている花もよく見ると花をつけている茎や枝は短かったり、長かったりしている。規格統一などされていない。それぞれの意志で以って自由に咲いている。規格制限されることなく、適宜個性を発している。生け花でも枝の長短を活かして全体の整った姿を創り出す。そして心を表現する。

地球の全員が同じだったら、どんなに恐ろしくつまらないかを想像してみてください。金子みすずの詩にあるように、みんな違ってみんないい。

4. おわりに

意味がとれるこれらの禅語を書道展で一行物として出品してきました。書、詩、画の三点が出来たことを三絶と言ひ文人を指しますが、新居浜西高定時制の聴講生として水墨画に挑戦しましたが、ものになりそうもありません。宰平の漢詩もかろうじて読み下しが出来た程度で縁遠く思っています。書齋の本棚にある禅語関係の本を参考文献として掲載しておきますので、その中の1冊でも読んでください。

5. 参考文献

禅語入門	檜崎一光	光文社
禅語百選	松原泰道	祥伝社
禅語の茶掛一行物 正・続・続々・又・又々	芳賀幸四郎	淡交社
禅語の四木季	柳田聖山	淡交社
禅語に生きる	立松和平	淡交社
禅語の四季	柳田聖山	淡交社
茶席の禅語大辞典	有馬頼底編	淡交社
禅語事典	平田精耕	PHP
禅の言葉	永井政之	永岡書店
心の深呼吸・禅語	永井政之	永岡書店
シンプル禅生活	金嶽宗信	永岡書店
禅	古田紹欽	現代教養文庫
禅のはなしー正・続	佐藤俊明	現代教養文庫
禅語百話	佐藤俊明	現代教養文庫
禅語百話	佐藤俊明	講談社
禅とは何か	鈴木大拙	現代教養文庫
仏教百話	増谷文雄	ちくま文庫
禅語遊心	玄侑宗久	ちくま文庫
こころの坐禅堂	松野宗純	PHP文庫
禅に学ぶ経営のこころ	松野宗純	PHP文庫

禅語百選	松原泰道	祥伝社黄金文庫
日々の禅語	秋月龍珉	徳間文庫
いいこがいっぱい起こる禅の言葉	植西 聡	王様文庫
しあわせになる禅	ひろさちや	新潮文庫
禅、頭の整理	藤原東演	知的生きかた文庫
禅に学ぶ人生90の知恵	公方俊良	知的生きかた文庫
禅語100選	西村恵信	知的生きかた文庫
道元禅の言葉	境野勝悟	知的生きかた文庫
一番わかりやすい禅入門	ひろさちや	知的生きかた文庫
禅に学ぶ人生90の知恵	公方俊民	知的生きかた文庫
禅に学ぶ人生の知恵	青根祥道	知的生きかた文庫
禅 ていねいな生き方	永井宗直	知的生きかた文庫
名僧の一言	中野東禅	知的生きかた文庫
禅とは何か	鎌田茂雄	知的生きかた文庫
禅 比べない生活	榊野俊明	知的生きかた文庫
茶席の禅語集一正・続・続々		後藤正慶堂
禅問答入門	田辺洋二	NHK
柳は緑花は紅	久保田	小学館ライブラリー
禅席の禅語一上下	西部文浄	タチバナ教養文庫
禅と食	小倉玄照	誠信書房
禅の精髓	中岡宏夫	誠信書房
道元禅入門	田里亦無	産能大
禅とは何か	吉田紹欽	NHK
絵で読む禅問答	公方俊良	日本実業出版
臨済録一禅の神髄	里道德雄	NHK
無の探求<中国禅>	柳田聖山・梅原猛	角川ソフィア文庫
禅の名言	綾瀬凜太郎	学研新書
禅のことば	武田鏡村	PHP
坐禅事典	平田精耕	PHP
活人禅	平田精耕	PHP文芸文庫
禅のいろは	玄侑宗久	PHP文芸文庫
禅からの発想	平田精耕	禅文化研究所
坐禅のすすめ	山田無文ほか	禅文化研究所
禅語散策	田上太秀	東書選書
坐禅入門	大山澄太	百華苑
禅学入門	鈴木大拙	講談社学術文庫

禅と日本文化		柳田聖山	講談社学術文庫
参禅入門		大森曹玄	講談社学術文庫
禅と浄土教		藤吉慈海	講談社学術文庫
禅語散策		田上大秀	講談社学術文庫
禅語の茶掛を読む辞典	沖本克己	角田恵理子	講談社学術文庫
中国禅		鎌田茂雄	講談社学術文庫
禅の心・茶の心		芳賀幸四郎	たちばな出版
絵で読む禅問答		公方俊良	ESCAROT BOOKS
禅の名言100		綾瀬凜太郎	学研新書
禅の作法に学ぶ美しい生き方・とゆたかな人生		榎野俊竹	朝日文庫
禅の言葉に学ぶていねいな暮らしと美しい人生		増野俊竹	朝日文庫
禅の教えに学ぶ捨てる習慣と軽やかな人生		榎野俊竹	朝日文庫
禅と茶の文化		吉田紹欽	読売選書
禅の文化		吉田紹欽	角川新書
禅の心茶の心	有馬頼底	真野響子	朝日新聞社
ほっとする禅語70		渡會正純監修	二玄社
続ほっとする禅語70		野田大燈監修	二玄社
玄侑和尚と禅を暮らす		玄侑宗久	海竜社
一日一禅(上・下)		秋月龍珉	講談社現代新書
医者がすすめるやさしい坐禅		高田明和	成美文庫
人生に自信がつく禅問答の名言		高田明和	主婦の友社
禅とはなにか		関口真大	教養文庫
禅 人生が楽になる生き方		有馬頼底	中経の文庫
無門関		西村恵信	岩波文庫
碧巖録	入矢義高 溝口雄二 末木文美士 伊藤文生		岩波文庫
臨濟録		入矢義高	岩波文庫
臨濟録		柳田聖山	大蔵出版
禅と茶		有馬頼底	学習研究社
禅マインド		鈴木俊隆	サンガ新書
禅茶の心		志山全慶	春秋社
茶と禅		伊藤古鑑	春秋社
禅の読み方		秋月龍成	日本実業出版
禅入門		武田鏡村	ぱる出版
禅とは何か		水上 勉	新潮選書
禅語百科	沖本克己	竹貫元勝	淡交社